

特別展記念講演会

平成22年11月7日(日)、歴史資料館講座室にて、第29回特別展「偉人たちの風貌－おおいたの肖像」の記念講演会を開催しました。講師に佐賀県立美術館の福井尚寿氏をお招きし、「近世肖像画の視点」の演題で約2時間ご講演いただきました。講演では、最初に大友宗麟と同時代を生きた肥前の戦国大名・隆造寺隆信の3枚の肖像画を例に、人物のイメージは画像によって左右され、それ故に安易な画像選定は像主の本来のすがたを失わせる危険があること。教科書でも紹介されている「伝源頼朝像」や「騎馬武者像(昔:足利尊氏像)」のように、そうだと思われていたものを深く研究していくと、実は違っていたなど、肖像画の人物がだれであるかを判断していくのは非常に難しいとお話がありました。また、肖像画の使命は、第一に像主に似ていること、第二に、やや矛盾することになるかもしれないが、像主の好ましい姿であること。さらに、肖像画が描かれたのが生前か死後か、誰がそれを意図し何の目的で制作したのか、画家は像主を見て描いたのかなど、肖像画を見る際の視点についても様々な事例をもとにお話いただきました。特に禅宗においては、正しく法をついだ証明として師から弟子へと授受された「頂相」と呼ばれる肖像画が描かれ、死後描かれた肖像は顔を左に向け、生前描かれた肖像は顔を右に向けるという決まり事があり、その後の武将像などにも踏襲されている例が多いことが紹介されました。また、狩野安信の「画道要訣」を例に、色や形を詳細に描かず、その人物の心を描くことに重きを置くのが日本の肖像画の特色であること。近世には学者や女性など描かれる対象が広がり、中国や西洋の影響を受け描き方も多様化すること。さらに、外国人が日本の肖像画をどうみていたのかなど、たいへん興味深い話がなされました。



講演会の風景

利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日(但し祝日の場合は開館、但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日)
- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円) 中学生以下 無料 ※団体は20名以上 ※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。 ◎入館時に受付で手帳を提示してください。 ※特別展開催中は別料金となる場合があります。
- 交通機関 JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分 大分バス[国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分 大分自動車道 大分IC・光吉ICよりともに約15分

発行日：平成22年12月11日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880 Fax097-549-5766
※大分市ホームページの「観光・魅力」歴史・文化財＞歴史・文化を学ぶ＞大分市歴史資料館」も併せてご覧ください。
(http://www.city.oita.oita.jp/)

テーマ展示解説講座

- 内容 講座室でテーマ展示Ⅲ「古地図が伝える大分の歴史」について、スライドなどで解説します。
- 日時 12月19日(日) 14時～15時30分
- 参加費 講座は無料です。 ※展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

- 実施日 12月19日(日) ●大分の歴史を訪ねて 府内城・江戸時代 ◎まんが日本昔ばなし 「おむすびころりん」「馬方とタヌキ」
- 1月23日(日) ●府内商人盛衰記/ミニ城下町 野津原 ◎まんが日本昔ばなし 「カチカチ山」「大沼池の黒竜」
- 時間 13時～14時
- 料金 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

ふれあい歴史体験講座

- 定員 各回70名程度(先着順)
- 時間 午前の部 9時30分～(約2時間) 午後の部 14時00分～(約2時間)

	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第16回	12月25日(土)	和風作り	午前・午後	200円	12月8日
第17回	1月22日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	1月6日
第18回	2月12日(土)	管玉・丸玉作り	午前のみ	260円	1月20日

■応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。
(大分市歴史資料館:097-549-0880)



凧揚げのようす

休館日のお知らせ

歴史資料館は、年末年始の12月27日(月)から翌23年1月4日(火)まで休館いたします。

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol. 93
2010.12.11



大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅲ

古地図が伝える
大分の歴史

12月11日(土)～1月30日(日)

古地図が伝える大分の歴史

会期: 12月11日(土)~1月30日(日)

開発によって日々姿を変える現代社会にあつて、昔の地図や絵図は、かつての地域の姿を顧みることのできる貴重なものです。そうした古地図には、地域の歴史とともに、失われた景観や人々の暮らしの様子が表わされています。

本展示では、国絵図・城絵図・村絵図などの様々な古地図を通して、大分が歩んだ歴史の一端をご覧ください。

西洋人のみた大分

種子島に鉄砲が伝えられた天文12年(1543)からわずか2年後、豊後にもポルトガル人が来航します。同20年には大友宗麟の招きでフランシスコ・ザビエルが来訪し、豊後でキリスト教の布教が行われました。以来、ポルトガル船も定期的に当地に来航するようになりました。そして、日本を訪れた宣教師やポルトガル人たちによって様々な日本の情報が西洋諸国へ伝えられました。こうした情報をもとに1595年に作成された日本地図がポルトガル人宣教師ルイス・ティセラの描いた「日本図」です。北海道は、まだ認識されていなかったため表示されていませんが、本州・四国・九州は、ほぼ今日の日本地図に近いかたちで表現されています。豊後に限ると、「Fumay(府内)」に加え、「Xanganoxeque(佐賀関)」、「Figi(日出)」の地名も記載されています。イエズス会の宣教師たちの報告書によると、府内は「豊後全国の首都」として紹介され、また佐賀関や日出は、彼らが九州から畿内地方へ行く際に利用した港として記されています。こうした宣教師たちの活動が地図にも反映されたものと考えられます。また、「Bungo(豊後)」の地名が九州のほぼ中央に表され、さらに九州の北半分にわたって大きく「BVN」・「GO」の文字も記されています。そこには豊後を拠点に豊前・筑前・筑後・肥前・肥後の諸国に勢力を広げた大友氏の歴史が色濃く表現されているものと考えられます。



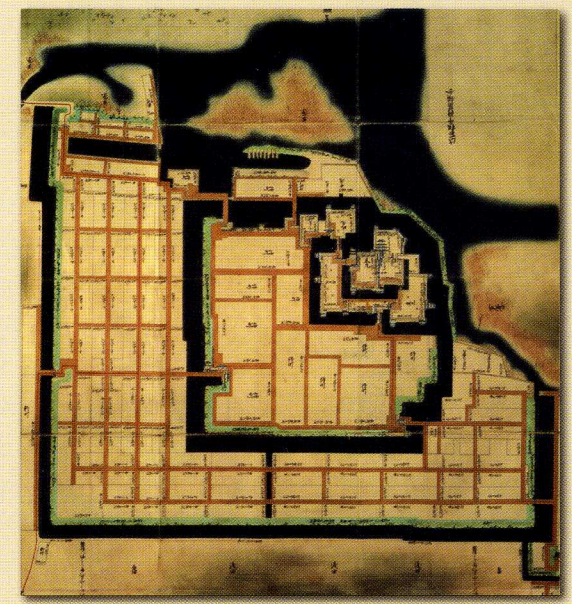
ティセラ「日本図」(1595)

江戸幕府が描かせた大分の絵地図

江戸幕府を開いた徳川家康は、慶長10年(1605)全国68ヶ国の国ごとの絵図を諸国の大名らに命じて作成・提出させました。「国絵図」と呼ばれたこの絵図は、幕府が中央政権としてその存在を大名たちに認めさせるために描かせたものといわれ、その後、正保・元禄・天保の各年間にも作成されました。豊後国では、まず各藩でそれぞれ藩領図を作成し、その後それらを持ち寄り、豊後最大の領知を有する岡藩中川家と、これに次いで領知高の多い白杵藩稲葉家と一緒に絵図を完成させることになっていました。完成した国絵図は、岡藩主の名前で最終的に幕府へ提出されました。「日根野時代府内藩領図」は、村を円形で表し、道を朱色の線で示し、1里塚を道の両側から挟む二つの朱点で表現するなど、国絵図に共通する表現方法がみられることから、正保の国絵図作成にあたり、府内藩が作った藩域図の下絵と考えられます。本府内藩領図では、領内はもとより周辺の他領の村々までもが描かれ、併せてそれらを領する松平忠昭(豊後高松藩主)、稲葉信通(白杵藩主)、木下俊治(日出藩主)、松平英親(杵築藩主)、細川光尚(熊本藩主)、中川久盛(岡藩主)、筑紫主水正(旗本)、松平忠直(元越前福井藩主)の領主の名前も表記されており、当時の入り組んだ江戸時代の大分の所領状況が分かります。また、海に面した府内城下や、高崎山・霊山などの主要な山々、その植栽などの有様までもが描き込まれています。



日根野時代府内藩領図



豊後府内城之絵図(模写 原本:内閣文庫所蔵)

国絵図とともに幕府が全国の大名たちに提出させたものに「城絵図」があります。「豊後府内城之絵図」は、「日根野時代府内藩領図」と同様、府内藩主日根野吉明が正保年間(1644~48年)に作成して幕府へ提出したもので、府内城の有様が克明に描き出されています。天守のある本丸へ入るには西之丸、もしくは東之丸を通らざるを得ず、その途中には廊下橋や櫓門が構えられ、4層の天守では渡櫓や取付櫓が配されるなど、府内城がたいへん堅牢な作りであったことが分かります。三之丸の「侍町」と町人が住む城下町との間には堀と土居が廻らされ、身分によって居住区が明確に分けられていたことも分かります。また、土居の上には植樹された松が立ち並んでいた様子も描かれています。

江戸時代の大分の生活や景観を描く絵地図

江戸時代の大分の住人たちの生活の様子がよく分かるものに「御城下絵図」があります。府内藩主大給松平家が治める城下や近郊の賑わいを描いた絵巻物で、別府湾に流れ出る大分川の景観にはじまり、府内城、仙石橋、住吉宮、柞原八幡宮の放生会の祭りの様子などが、祭り見物に行く藩主の行列を軸に描かれています。柞原八幡宮の放生会の祭礼市である「浜の市」では、人形芝居や花火大会も催され、様々な人々が集い楽しんでいる光景が生き生きと描きだされています。同じく江戸時代の大分の景観を詳細に描いた絵地図に「杵築府内間山水図」があります。杵築城下から府内城下までの別府湾岸の景観を鳥の目線で描き10枚の木版画にしたもので、図中には400件をこえる地名や寺社・旧跡の名前が記されています。別府近郊では80余の湯屋や地獄の名前がみえ、温泉地として賑わう様子がうかがえます。府内城下では多くの人家が密集し、当地を訪れた福岡藩の儒学者貝原益軒が「町は頗るひろし」と描写した様子もみてとれます。また、高崎山・鶴見岳・由布岳などの山々が連なり、沖合では船が行き交い、網漁も行われるなど、風光明媚な大分の景観が詳細に描き出されています。



御城下絵図(17世紀後半~18世紀前半) [大分市指定有形文化財]

表紙紹介

李氏朝鮮の官人、申淑舟が1471年に著した『海東諸国記』の写本で、そこに載せられた「日本西海道九州之図」です。豊後は当時「大友殿」の支配するところとして記載されており、本地図では日向国の一部としてありますが、豊後の「左我関(佐賀関)」の地名も記されています。豊後国の沖合には、南海から日向・豊後・豊前の海上を通り、「文字関(門司関)」を迂回して博多へと至る、やや太めの白い線が走っています。これは博多と琉球などの南海諸島とを結ぶ主要な海上ルートを示したもので、その盛んな交易を物語っています。佐賀関は、そのルート上、いわゆる豊後水道の要所として認識され、その地名が記載されたものと考えられます。